

ヘルパー日誌 (5)

きいてください 私たちの仕事のこと

石川・やすらぎ福祉会
ヘルパーステーションやすらぎ

川上 範子

事例 私たちが日ごと 見聞きしていること

当ステーションは九九年、金沢市の西南部にある特養ホームに併設されました。利用者一人ひとりのその人らしさを大切に、安心して住み続けられるまちづくりを目指し、毎日一五人のヘルパーが地域に出ています。訪問で見聞きすることは考えさせられることばかり。そのいくつかを聞いてください。

●Aさんは最近病状の進行で体が思うように動きません。だけどいつも明るく笑顔です。

「朝早くから悪いね。見て、お流しむたむたねん。食べるだけ食べたけど片付けられなかった」そういいながら体が傾いてくるAさんをヘルパーがあわてて支えます。「何でこんな病気がなったんかね。きっと神様は私が耐えられると思ってこの病

◆介護ウエーブ起ります！
ヘルパーも働き続けたい！

全日本民医連は介護保険の改善を求める署名運動を始めています。皆さんも協力してください！

気をくれたんやわ」今度は床に落ちたゴミを拾おうと手を伸ばし、体が床に倒れかかったところを引き戻されます。

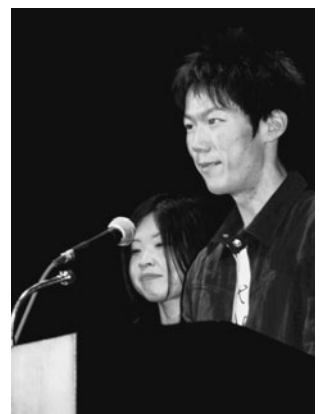
いつも一生懸命なAさん。私もいつも笑顔で思うけど、Aさんには勝てない気がします。病に向かう姿勢、他を思いやる心。出会いに感謝です。

●Bさんはまだ五〇代。「ヘルパーさんの仕事は大変ね。でもヘルパーさんに来てもらう人より、ヘルパーとして働いている人のほうがずっと幸せよ」この言葉に私はショックを受けました。

今、ヘルパーを利用している人の中で、自分から望んで利用している人よりも病気や障害のためにやむを得ず、我慢してサービスの頼んでいる人のほうが多いのではないのでしょうか。「望んでしてもらおうこと」と「望んではないけれど、どうしても、してもらわなければならない立場」の違い。そのことを私たちは常に心に刻んで、利用者さんに接しなければと思いました。

●「あんたらが来てくれるから、こうして家で暮らせるんや」と、要支援のCさん。いつもヘルパーの訪問を待っておられます。独居のため丸一日誰とも話さないこともあるそうです。

腰痛で掃除機は持てませんが、はたきをかけたりモップがけをしたりと、いつも一緒に動いていたCさん、最近



「福祉労働者の仕事をもっと評価して」東京の集会でアピールを読んだやすらぎホームの仲間

元気がありません。「鼻くそほどの年金から引かれることばかり増えた。先のことを考えると、はようあつちの世界へ行きたくなるわ。頭はだんだんあんぼんたんになってくるし。ほーかといって上のほうの人は悪いことばかりして、どねんとね…どう思う?」。訪問時間の半分は社会情勢の話題です。

「一人でいると、うつつととしてくる。寂しいもんやよ。一人は…」
当ステーションの四月利用者六六人中二九人(約四四%)が一人で暮らしおられます。

◆
後期高齢者医療制度、来年の介護報酬改定など、ますます強められようとする給付制限と負担増。こんな時だからこそ、利用者と同じ目線で、現場からの声を発信し続けたいと思います。

ほっと介護

78